

第三章 そして禁断の技術は生まれた

◆もし意図的に情動伝染をできたとしたら？

ではさらに具体的な「技術」の内容についてお伝えしたいと思います。

「情動転写の技法」の最大の特徴はなんだと思いますか？

それはまさに文字通り「自分の情動を相手に伝染させること」です。

ただ「相手を夢中にさせることができる」というのであれば、魔法のようで簡単です。

ですがそうではなく、お伝えしてきた通り「脳とココロ（潜在意識）の原理と仕組み」に基づいた技術なのです。

それは「感情の転移」であり、「ミラーニューロン」であり、遠隔で言えば「リモート・ビューイング」などを応用したものです。

ですからまずは「自分の中に相手に転写させたい情動」を作り出さなければなりません。

そしてそれは恋愛においてはさほど難しい事ではありません。

なぜならそもそもが「大好きでたまらない彼」に仕掛けるのですから、その恋する情動を利用すれば良いのです。

つまりは「彼を強烈に好きなほどに、術は強力に働く」ということです。

実はなぜそのような都合の良い技術を身に付けられたかという、私自身「好きな相手にだけ夢中になって欲しい」という願いがあったからです。

ですから本気の恋ほど叶う確率は高くなります。

それは恋する女子にとっては、夢のような話ではないでしょうか？

あなたの「彼を想う切なくも純粹なる好きという気持ち」がそのまま、彼があなたを想う気持ちになるということです。

結婚してずっと一生を共に生きていと願うなら、そのような「望んでいる状態の時に感じている喜びや充実感の情動」を転写すれば良いのです。

実は言葉以上にそれらの【情動】は多くの情報を持っています。

「彼に感じてもらいたい情動」を自分の中に生み出して、それを意図的に彼に転写していく。

強くリアルな情動を生み出せるほどに、彼に対しても強い影響力を持つようになる。

そうした働きかけを行っていくことで、ご紹介したように「結婚」や「復縁」といった恋愛での望みを叶えることができるようになるのです。

あなたはどんな「情動」を彼に書き込みたいですか？

◆強烈なイメージがありえない復縁を成就させた

物理的空間よりも抽象度の高い情報空間にアクセスすること。

それが相手へ情動転写をする第一の条件になります。

とはいえ、私達現代人は日頃から物理的な空間から抜け出して、情報空間に入り込んでいます。

イチバン身近なところで言えば、インターネットやテレビなどのメディアです。

認知の定義として「現実とは今この五感でとらえられるもの」です。

NLP（神経言語プログラミング）では内的なイメージなどの表現で使われる五感をハッキリと区別しています。

つまりは「本当に起こっていない情報上の出来事」というのは全てバーチャルリアリティであるということです。

ただもっと突き詰めて言えば、私達の脳の認知の仕組みでは「あるがままの現実」を捉えることはできません。

視覚一つとっても、かなりの情報が削除されて処理されています。

紫外線や赤外線などの光波は肉眼では見えません。

見えるのは本当にごく一部の「可視光線」でしかないのです。

そういった意味で言えば、かなりの情報を都合よく編集して映し出しているのが私達の認知であり意識なのです。

それは「この世界は脳の認知システムが作り出した現実にソックリなバーチャルリアリティ（仮想現実）」であるということです。

ただここではそういった認知的な本来の意味とは別に定義したいと思います。

つまりは映画やインターネットの情報は、ただの光の集合に過ぎないということです。

ただ、そういった「映像らしきもの」が画面にあらわれているだけです。

液晶が色んな光の色彩のパターンで点滅してるといっていいでしょう。

ですが悲しいストーリーのドラマを見れば、本当に胸が痛んで涙を流したりします。

ですが誰もそれを本物ではないことを知ってるわけです。

アタマでは理解しているけれども、感情的な認知としては「本物」であると感じているのです。

深く感情移入して臨場感が高まれば、それを脳は現実として受け止めるのです。

それはマンガでも音楽でも同じです。

マンガなどはさらにひどく、ただのインクのパターンの集まりです。

音楽も色んな音階の音を組み合わせた「音の羅列」に過ぎないのです。

そこに情景を思い浮かべ、リアルな感情を感じるというのは「高度な情報処理」ができる私達人間だけが持つ特性であり能力です。

つまりは情報空間とは私達の脳の中にあるということです。

それは私達の意識が生み出した「もう一つの世界」です。

そんな内的な意識の世界を誰もが持っています。

「あるがままの現実」に色々な情報を盛り込んで、自分だけの世界を作っているのです。

◆鍵は「臨場感」にアリ

「無意識に介入する」とは、まさにそういった【相手の意識の中にだけ存在する現実】に割り込んで行くということです。

そう聞くと「とてもじゃないけど、そんなことはできない」と感じてしまうかも知れません。

ですがここまでお伝えしてきた通り、そもそも私達の意識の深いところでは「境界線」などないのです。

だからこそ「以心伝心」のように、相手が考えていることやイメージを共有したりしながら共感的にコミュニケーションが取れるのです。

ミラーニューロン然り、ホメオスタシスの同調然りです。

つまりは生体的な同調を含めて、そもそも私達の無意識は情報空間でリンクしながら色々なやり取りをしているのです。

無意識の影響力を持つほどに、相手を思うままに動かせるようになります。

誤解しないで欲しいのですが、本来的には「他人をコントロールすることはできない」のです。

私達の意識……つまりは普段こうしてコレを読んでいるように、理性と意志を使っている意識は唯一の自由意志であり創造主なのです。

潜在意識に対して、一般的に【顕在意識（けんざいいしき）】と呼ばれます。

ですが潜在意識はそもそも境界線のない世界に存在しています。

私も他者もない絶対的なワンネス（一体感）と愛の世界です。

前著「LOVE & DREAM～恋愛と願いを叶える引き寄せレッスン」でも書いたのですが、情報空間とは物理空間よりも一つ次元の高い抽象度の世界です。

時間と空間を合わせたこの世界が三次元+ α であれば、まさに情報空間を合わ

せれば四次元になります。

次元間の法則性として「上の次元の世界は、下の次元の世界を包括する」ということがあります。

つまり情報空間は物理空間を含んでいるということです。

ですから物理空間からは情報空間に働きかけることはできません。

仮にできたとしても、物理空間側からはそれをコントロールしたり認識することはできません。

ですが逆に情報空間からは、この物理空間に対して自由に働きかけることができるということです。

ではどのように働きかければ良いのでしょうか？

その鍵こそが「イメージ」であり、臨場感ということです。

◆リアリティとは「強い情動」を感じることに

臨場感とはすなわち「リアリティ」です。

より「強い実感を伴っている」と言えば良いのでしょうか？

実在というとまた少し難しくなるかも知れませんが、私達は内的なイメージの世界と現実を区別しています。

どこかで「強い現実に対する実感」を感じているのです。

そしてここからがとても大切なのですが、脳とココロ（潜在意識）にとってそれが「本物である必要はない」ということです。

つまりは「臨場感＝リアリティ」が高ければ、それが現実として認識されるのです。

だからこそ、ただの光の点滅のパターンであるはずの映画のスクリーンの無機質な設備機器を見ただけで泣いたり感動したりできるのです。

本当の現実映画館の椅子に座って、大勢のまえで映写機が映し出す「光の点滅」を見ているだけです。

ですがそこに本物と同じように臨場感を感じるのは、なぜなのでしょう？

それは色々な映像的な効果もあります。

なのですが、一番の理由は「強く情動が動く」からです。

私達は映画に出ている俳優さんたちの「迫真の演技」に心を打たれます。

さながらそれが本当に目の前にいる人間の深い悲しみや喜びのように、リアルに感じてしまうのです。

なぜならそれは演じてる俳優さんたちの「情動」が見ている私達に伝染するからです。

そう、日常的にも「情動転写」は起きているのです。

自分の中に「強いリアルな情動」を生み出せれば、私達も俳優さんのように相手に強烈な情動を伝染させることができるということです。

◆ 「情動」 = 「体感覚」という気づき

では「情動」とはいったいなんなのでしょう？

先にも書きましたが、それは「身体感覚を伴った、急激に沸き起こる感情」のことです。

そして根っこにあるのは、ダイレクトに身体に感じる感覚です。

それは理性脳である「大脳新皮質」よりも深い、情動を司る哺乳類原脳（情動脳）である「大脳辺縁系」や、さらに爬虫類脳（反射脳）と呼ばれる「間脳や脳幹」レベルでの反応です。

つまりは理性ではコントロールしきれない、原初的でしごく生理的、本能的な反応であるということです。

そして私達を深いところで動かしているのは、そんなひどく原初的で生理的、本能的な部分であるということなのです。

ですからここに働きかければ、理性を超えて相手を動かすことができってしまうということです。

その鍵となるキーワードこそが「情動」ということなのです。

それは言語がまだ発達していない時代に、私達人間が様々な情報を伝達しあつた原始的な「ノンバーバル言語（非言語的言語）」です。

それは例えば、外敵が来た時に「気配」として感じたりする感覚として危機を教えてくれていたりしました。

情動によって私達は意思の疎通や、コミュニケーションを図っていたのです。

情動をもっともシンプルに表現するなら「体感覚」ということになるでしょう。

深い内なる身体から生まれる様々な感覚。

それが言語以上に繊細なフィーリングを太古の昔から私達に伝えてくれていたのです。

そして詰まるところ情報空間から「体感覚」に働きかけることができたなら、より強い情動的な影響…つまりは相手の無意識の世界に色々な情報を書き込むことができるということです。

◆もし「恋するドキドキ」を相手に転写できたなら？

つまりは「深い内なるドキドキの感覚」を相手に転写できたなら？

そのドキドキはつまりは「大好きな彼と恋人同士になって付き合っているとき

の波動情報」です。

彼の脳とココロ（潜在意識）をはじめとするニューロシステムは、その情報にある「意味」を解読します。

つまりは左脳的で論理的な情報処理としては理解できなくても、なんとなく「あ、この人と恋人になるんだな」ということが感覚的に入ってしまうということです。

それは「パブロフの犬」と同じです。

パブロフの犬ではベルを鳴らしてエサであるお肉を与えました。

繰り返すうちにお肉をあげなくても、ベルを鳴らすだけで犬は「ヨダレ」を垂らすようになりました。

つまりは「ベル」＝「お肉を食べる快感とヨダレという反応」として条件反射が作られたということです。

ベルの音を聴いたときに感じる特別な恍惚感とヨダレが出てくる感覚。

それはまさに「お肉を食べる」というエピソードの情報を含んだ感覚です。

「体感覚」とは私達のより深いところから出てくる【もう一

つの言語】です。

それは脳幹や間脳といった「フェアリーブレイン（爬虫類脳）」という太古の生命のリズムを持った脳のエリアで処理される情報です。

テレパシクに伝わる情報は、むしろ通常の「言葉」よりもこういった【もう一つの言語】によってなされます。

そして重要なのは、そういった情報は深い部分で処理されますが「理性」といった意識には理解されないということです。

つまりは「相手の無意識に意図した情報をすべり込ませることができるといことです。

無意識に働きかける術は「相手に気づかれない」ということが大前提です。

ですから催眠では常に意識ではなく、潜在意識にメッセージを送り込みます。

そのため「十秒数えたら、だんだんと眠くなる」といった誘導で意識をシャットダウンさせていくのです。

ただ二十世紀最高の天才的催眠療法家と言われた「ミルトン・エリクソン」は、そういった「古典的催眠誘導」をしませんでした。

いつもと変わらない会話のなかで、【催眠言語】と呼ばれる特殊な話法と言語の使い方をすることで、自由自在にトランス（催眠）にクライアントを入れたり出したりしていたと言われていています。

それは当時「眠くなる」とやっていた古典派催眠から見ると、とんでもない「魔法」のようであり、実際に彼はその鮮やかな催眠手法から【魔術師】などと呼ばれていました。

それは私達が馬車から自動車に移動手段を変え、さらにはジャンボジェット機のような飛行機に乗って世界を飛び回るくらいの革新的な進歩と言えるでしょう。

彼の手法は【現代催眠】と呼ばれ、リチャード・バンドラーとジョン・グリンダーが共同開発したNLP（神経言語プログラミング）などにも取りいれられて世界中に広まって行きました。

そして、時代はさらに進みました。

私達は新たな「次元間を移動する乗り物」を今手にする瞬間に来たのです。

「二十世紀最高の天才催眠療法家」と言われたエリクソンでさえ、基本的には【言語】を使っていたのです。

もちろん、エリクソンは表情や声のトーンなどのノンバーバル【非言語的言語】も多用しながら施術を行っていました。

ですが今お伝えしている「情動転写の技法」ではそういった【外的に働きかける言語】すら必要としないのです。

言葉として発話する通常使う言語を「第一言語」としたら、表情や声のトーンなどのノンバーバルなメッセージを伝えるのは「第二言語」と定義できると思いま

す。

それに比べて、物理的空間の制約を受けずにより高い情報空間から働きかける言語を扱うのが「情動転写の技法」ということです。

それは言ってみれば【右脳的第三言語】です。

そしてそれはここまでお伝えしてきた通り、ただ「超能力的な力」というあやふやなものではないということです。

私達が生得的に持っている「感覚的能力」に根ざしています。

さらに種の保存や「第一言語」が存在しなかった太古に我々の祖先が意志の疎通を図っていた【元々存在していた本能的な意思疎通の言語的感覚】ということです。

◆巷の引き寄せの法則より LOVE インフルエンスが強力な理由

巷の引き寄せの法則は「潜在意識」を使って現実化を促します。

潜在意識に正しく未来の情報をインプットすることで、自身の発する波動が変わります。

すると周りの波動が影響されて変わり、さらにはそれが広がって自分の住んでいる世界の波動が変わる。

その影響が人生のいたるところに現れて、その茗荷として大好きな彼との恋も叶っていく……大体そのような感じだと思います。

そうなる「ポジティブな波動でいること」や、プラス思考でいることが良いことになります。

たしかにそれは波動的な量子力学などのエネルギー的現実を考えれば、とても理にかなっていると言えるでしょう。

私達の全てはエネルギー的な素粒子です。

それは最終単位では「super strings 理論 (超ひも理論)」で言われるように、ひも状のエネルギーなのかも知れません。

いずれにせよ、色んなリズムの波長を持ったエネルギーの集合体が私達や宇宙を構成しているということです。

そしてお互いに影響しあいながら、エネルギー的な交流をしながらこの壮大な宇宙という現実を織りなしているわけです。

私達の「思念」もエネルギーであり波動です。

ポジティブな波動は当然、身近な現実に影響を与えるでしょう。

その結果、世界が変わり…というのは良いのですが、同じ理屈が通用するなら勿体ない考え方です。

つまりはわざわざそんな遠回りなことをしなくても、直接「大好きな彼の波動」に働きかけたほうが手っ取り早いということです。

「そのようなことで、人の心を操作するのはどうかと思う」という
道徳論はさておき、原理的には全くもって可能なことです。

いえ、むしろ生体的な元々の波長が等しく近しい同種の個体である我々は、より
同調が起こりやすいと言えます。

モチロン、悪意を持ってやればそれは洗脳であり、モラルからみても良くないこ
とでしょう。

ですがお伝えしてきた通り、この技法の最大のキモは「自身のなかにある情動を
相手に伝染する」ということです。

どこかに相手を利用しようとする思考や悪意があれば、伝わってしまいます。

仮に意識が気づかなかったとしても、潜在意識はちゃんと知ってい
るのです。

多くの小手先の心理テクニックが現場ではほぼ使えないのも、そういった理由
からです。

テクニックに走るほど「なんだかアヤシイ」と感じてしまうのは、逆の立場でや
られたことを考えても明らかでしょう。

ですが本当に純粋に彼を想う気持ちを持っていたなら、それはダイレクトに彼
の心を深いところから動かすでしょう。

それは綺麗事でも理想論でもなく、正しく「情動転写の技法」を行ったときに起

こる【原理と仕組み】からみた答えです。

◆鍵は「相手の無意識に侵入すること」

では「情動転写」をスムーズに効果的に行うにはどうしたら良いのでしょうか？

その大きな鍵となるのが「相手の無意識に侵入すること」なのです。

先にも書きましたが、こういった潜在意識に働きかける手法では「相手に気づかれない」ことが大前提になります。

いかに「相手の意識に気づかれないように、潜在意識に暗示を入れるか？」が催眠と同じく大切であるということです。

潜在意識は良くも悪くも「自動運転」です。

それが自分にとって良い事であっても、悪い事であっても「意識」からの指示がなければそのまま自動でそれを続けてしまいます。

「やめたいけれども、つい気づくとやってしまう習慣」などがそれに当たります。

「もうグチっぽいことばかり言うのはやめよう」と思っても、気がつくとまたグチてします。

これなども意識しているときはできているはずですが。

ですが意識が外れた瞬間に、無意識が勝手に元々習慣的にあるパターンを行っ

てしまうことで起こります。

意識しているときは、潜在意識は意識のコントロール下にいます。

よく「人生のハンドルを握り直す」と言いますが、それはそういうことです。

あれは単なるメタファー（例え、比喩表現）ではなく、脳とココロ（潜在意識）の仕組みから見た「正しい潜在意識の操作方法」であるということです。

そしてここからが大切なのですが、そんな「潜在意識のハンドル」は自分以外の誰かに握られてしまうことがあるということです。

逆に言えば、大好きな彼に気づかれぬように無意識に侵入できれば、事実上「潜在意識のハンドル」をあなたが握ってしまうことができるということです。

ただもう一つ大切なのは「潜在意識は常に自分を守るために働く」ということです。

ですから生存を脅かすような指示や、不利益を被るような要望には従わないということです。

そもそもこれを読んでくださっているあなたは、そういった考えはお持ちになっていないと思います。

「純粹に愛する彼と一緒に幸せになりたい…」

そのように感じているなら大丈夫です。

なぜなら潜在意識は「自分を守ってくれようとする存在」にこそ、心を開くからです。

◆ラポール＝共感という心の扉を開く技術

「相手の無意識に侵入する」と言うと、つい勘違いされる方も多いです。

何かテクニックを弄してダマして心隙に入り込む。

そういったイメージがつきまとう感は否めません。

ですがお伝えした通り、私達の潜在意識は常に「自分を守るために働く」のです。

当然そのような「悪意」を感じた瞬間に、私達の潜在意識はそういった存在をシャットアウトしようとしてます。

つまりは「なんとなくアヤシイ」といったように、警戒されて心閉ざされてしまうということです。

そう考えると、意外と「相手の無意識に侵入する」というのは言うは易しですが、それほど簡単ではないという気がしてきます。

ですがそれは「相手をなんとかして、うまくやってやろう」という最

初の発想を変えればすぐに答えが出ます。

先にも書きましたが私達の潜在意識は「自分を守るために働く」のです。

そして「自分を守ってくれる存在をこそ、喜んで受け入れる」のです。

つまりはそれこそが【答え】なのです。

まずはこちらが心を開いて、相手の全てを先入観なく受け入れること。

共感的に相手を感じ、相手の感情を同じく感じるように寄り添うこと。

共感は一体感を生み出します。

それは脳波や生体的な同調を起こし、相手との心理的、エネルギー的な【境界線】を溶かして行きます。

その瞬間、相手が自分を守ろうとしていた「意識のバリア」が解かれます。

つまりは心を開いて「相手を受け入れる」という状態になるわけです。

こうなれば後はそれほど難しいことはありません。

ゆっくりと自然体で正面玄関から彼の深い心に入って行けば良いのです。

そういった共感的な彼の心とつながった状を、カウンセリングなど

では「ラポール」と呼びます。

そしてここからが大事なのですが、ラポールはより【生体的で物理的な同調】であるということです。

言い方を変えるなら、【波動的エネルギー的な同調】であるということです。

ですので「いい人で優しくすれば、ラポールが作れる」というわけではありません。

「イライラ」している人といると、なぜか「イライラ」が伝染して自分も同じようにイライラしてしまう。

これなどはあまり「共感的なコミュニケーション」とは関係ありません。

ですが同じ時間と空間を共にしたり、会社の同僚や上下関係などであったりなどの【同じ集団に属する運命共同体】では自然と起こってきます。

「ホメオスタシスの同調」とは生体的な環境へのバランス調整です。

つまりは周りの人的なことを含めた環境に調和的に適合することで、より安全で快適でいようとする働きです。

ですから「場の空気」が強い「イライラ」に支配されていたら、その流れに合わせて環境適応しようとするのです。

そういったこともありますので、ただ単純に「共感」ととらえてしまうと【ラポールの本質】から少しズレてしまいます。

そのことを理解された上で、それでも基本的には「共感的に同調すること＝ラポール」が大切であるということ覚えておいていただければと思います。

◆強い情動+共感＝情動転写

「情動転写」……つまりは大好きな彼に望む感情を伝染させる要素は二つあります。

その一つが、先ほどお伝えした「共感」です。

それもいわゆる受容的な共感だけでなく、生体的なレベルでの同調という意味での「ラポール」が必要になるという事です。

そうすることで私たちの脳とココロ（潜在意識）のネットワークは一つにつながります。

つまりは「同じ情報（情動）を共有する」ようになるのです。

そしてもう一つ重要な鍵となるのが「強い情動」です。

いくらオンラインで相手とつながれたとしても、もしデータを送る側の出力が弱ければ届きません。

それは回線状況が不安定な状態のケータイ電話での通話と同じです。

言葉が聞き取りにくかったり、途切れ途切れになったりして、正確な情報を伝え

ることができないということです。

そういった意味では情動などの「念波」もケータイの「電波」も、【波動】という同じ性質を持っているとてもよく似たエネルギーであると言えると思います。

共感的に同調して、周波数をしっかりと合わせること。

そして自分の中に強い「情動」を生み出して、共有する感覚データとしてパソコンの添付ファイルのように相手に送信すること。

原理としてはとてもシンプルです。

この二つがしっかりとできれば、大好きな彼をメロメロに出来てしまうということです。

ですがここでよく考えて欲しいのです。

それはこの技術が単に「相手をホレさせる」ということではないという事です。

もし単純に大好きな彼を欲情させたいのなら、「スカートの丈を短くする」だけでも良いかも知れません。

ですが「情動転写の技法」はそういったこともできますが、それ以上の情報データを相手に送ることができるのです。

今までの「引き寄せの法則」をはじめとした【潜在意識を使った願望実現】の定義としては、「自分に理想のゴールをプログラムする」という考え方です。

キチンと「理想のゴール」インプットできれば、意識の一万倍のパワーを持つと言われる潜在意識が勝手に叶えてくれるという事です。

潜在意識はこの世界の全体性である「大いなる意識」とつながっています。

スピリチュアル的な言い方をすれば「宇宙が色々と味方をしてくれて、ドンドン願いが実現していく」といった感じになります。

そして実は、それは脳の仕組み的にも当てはまります。

脳には「志向性」を持っています。

ゴールを設定すると二十四時間、三百六十五日ゴールを達成しようと働きはじめるのです。

それはあたかもゴールさえ入力すれば、自動操縦で目的地まで運転してくれる「オートパイロット機能」のようなものです。

そんな「脳のゴール自動追尾機能」を最初に大々的に世に知らしめたのは、整形外科医であった「マクス・マクスウェル博士」です。

彼はこの脳の働きを、「サイコサイバネティクス理論」として独自の研究と共に発展させました。

ですが「情動転写」では自分だけではなく、【相手の脳とココロ（潜在意識）】に

ゴールを書き込んでしまうのです。

「情動レベルの情報」とは、私たちが普段使っている「左脳の言語」よりも抽象度が高い情報です。

「パブロフの犬」でも説明しましたが、ベルが鳴った時に溢れ出す「ヨダレ」と共に感じる恍惚感はまだそれだけではないのです。

そこには【美味しいお肉をほおぼっている】という体験的なエピソードと物語の情報が含まれているのです。

いつも可愛がってくれている飼い主の笑顔と美味しいお肉。

幸せな至福を感じながらお肉を一気に食べて、満腹感に包まれて優雅にお昼寝をする。

そして夕方になったら、飼い主である優しいママに連れられて大好きなお散歩に出かける。

そんな一連のストーリーすらも、「ベルを聴いた時に感じるヨダレが溢れ出す恍惚感」という感覚情報に含まれているという事です。

【感覚情報】とはシンプルに言うなら「フィーリング」と言っても良いと思います。

それはすなわち【波動】ということです。

そんな「フィーリング」＋「波動」を読み解く事で、人の心や場所や物から色々な情報を得るのが【サイコメトリー】と呼ばれる方法です。

事件などで残された遺留品を手に取り、その残された「残留思念」からの感覚的な情報を読み解くことで犯人の情報を得るサイキッカーの姿。

なんとなく映画やドラマでそんなシーンを見た事があるのではないのでしょうか。

逆に言えば「思念」や「色々な情報」の波動的なエネルギーを物品や場所に入れることもできます。

それがヒーリング的な「エネルギー注入」であり、場の浄化です。

人にやるのであれば、そのままアチューンメントやヒーリングになります。

そういったことで、情動転写では「ただ相手を好きにさせる」という以上の情報を相手に書き込むことができるという事です。